



Title	<書評>Daniel Parrochia et Valentina Tirloni (ed.), Formes, systèmes et milieux techniques après Simondon, Jacques André, 2012
Author(s)	上野, 隆弘
Citation	年報人間科学. 2016, 37, p. 189-193
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54586
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈書評〉

Daniel Parrochia et Valentina Tirloni (ed.)***Formes, systèmes et milieux techniques après Simondon***

Jacques André, 2012

上野 隆弘

はじめに

ジルベール・シモンドン（1924-1989）は個体化論と技術論について注目すべき仕事を残したフランスの哲学者である。その個体化論はジル・ドゥルーズ（1925-1995）の思想形成に多大な影響を及ぼしたとされており、ドゥルーズ研究の進展とともに近年シモンドン哲学に対する関心も高まってきている。また、技術論もベルナル・スティグレル（1952-）の積極的な言及などもあってその「技術進化」の着想が再評価され、技術に対する新たな理解を提起するものとして期待されている。シモンドンの哲学は、デカルト以降綿々と受け継がれてきたフランス技術論のある到達点を示すものであり、決して看過することは出来ない。われわれはそれを引き受けつつ現代の技術に適合した議論を練り上げていかなければならないだろう。

こうした状況のもと、本書のもととなるコロック（*Formes, systèmes et milieux techniques*）が2011年10月にリヨン第3大学（l'Université Jean Moulin）で開かれた。総勢19名の論者による18本（内、1本は二名による共著）の論文が収録されている本書は、リヨン第3大学の教員である Daniel Parrochia と Valentina Tirloni によって編纂され、2012年に出版された。Daniel Parrochia は現代を代表するエピステモロークの一人である。自身の専門である数学や論理学の哲学のみならず技術に対する関心も高く *La conception technologique* (1998) といった著書を公刊している。もう一人の編者である Valentina Tirloni は、法学の修士号も取得している人物で政治哲学や技術哲学を専門とする研究者である。本書に収録されている論文の著者はそれぞれの専門に根ざした議論を展開しているが、緩やかなまとまりのもと各論文は四部に振り分けられている。紙幅の都合上すべての論考を紹介出来ないため、全体の概要を示した後にシモンドンの哲学について詳しく論じた Vincent Bontemps の論文を扱うことにする。

全体の概要

はじめに各部の概要を示しておく。「ブリコラージュから現代テクノロジーへ」と題された第一部は5本の論文から構成されており、歴史的観点から技術を論じたものが集められている。技術史の研究は単に過去の技術を回顧的に扱うだけではない。技術の進歩は利便性の向上をもたらすだけでなく、同時に新たな生活様式や社会的規範をも作り出す。ここでは歴史的手法を用いつつ、技術がわれわれの生に与える

影響を明らかにしようとする議論が展開されている。たとえば、Robert Damienと Gérard Chazalの論考はいずれもある技術的対象が社会にどのような影響を与えてきたのか詳しく検討するものである。前者の「剃刀の称賛—髭の小形而上学への序説」はKing Camp Gillette (1855-1932)の安全剃刀の発明とその利便性の向上が髭を剃った顔と髭をはやした顔の二つの顔を生み出し、そうした二種類の顔が近代的で合理的な西洋人と時代遅れで反体制の後進的な東洋人という区分に一役買っていることを主張する。後者の「技術的インターフェースとしての自動車」は20世紀の自動車の普及がわれわれに及ぼした影響を主として農業的生産の場面に力点を置きつつ論じたものである。自動車の導入は単に農業様式の変化という表面的なものに留まらずわれわれの時間・空間概念に変様をもたらしたと主張している。

「技術的系譜から思考のテクノロジーへ」と題された第二部ではインターネットをはじめとした現代のテクノロジーが、また、そうしたテクノロジーと科学との関わりを論じた論考が4本収録されている。シミュレーションにみられように現代の科学研究は理論と実験という古典的な分割が機能しないようなテクノロジーサイエンスの様相を呈している。Frank Varenneの「シミュレーションによる現象学的再構築—simulationの豊かさに向けて」などは科学と技術のそうした交わりを問う論考である。

「技術と生物」と題された第三部には4本の論文が収められている。シモンドンの技術進化の思想は技術的対象の歴史のうちに生物の進化と類似した発展を認めるものである。シモンドンをはじめとして、フランスには技術を人工物として自然や生物から分離するのではなく、それらと連続的な視点から捉えようとする議論が少なからず見受けられる。例えば、Martine Robertの異色の論考「生物の特徴に照らされたビデオゲームの作用」はそのひとつである。これはレーシングゲームにおいてプレイヤーがあたかも実際に車を運転しているように感じるビデオゲームの潜水 (l'immersion) 現象を生物の観点から解き明かそうとするものである。ビデオゲームが遠近感を与えることが出来るのはそれが生物の特徴的な存在形態を実際に模倣しているからだと主張されている。ここで触れられているヴァーチャルリアリティの問題は技術論において今後ますますホットな話題となっていくだろう。

「技術に対する他の視線 (技術と政治)」と題された最終部にはこれまでの分類に当てはまらない論考が収められている。Frank Perret-Gentilの芸術論「まなぎしのアトリエと自然の製作所」などがそうであるが、副題にも見られる通り技術と政治を主題としたものが多い。技術と政治といえば科学技術政策論といったようなものが想起されるが、ここで論じられているのはフーコーの仕事を引き受けた上でのテクノロジー論や統治論のことであり、広義の技術論が展開されているといえるだろう。編者の一人であるValentina Tirloniの論文「技術とカ—官僚の事例」などがそれにあたる。

シモンドン、技術的系譜の進歩と進化

次に、本書の中でもっともシモンドン哲学との関連が深いVincent Bontempsの論考「シモンドン、技術的系譜の進歩と進化」を詳しく取り上げたい。この論考は技術のprogrès「進歩」に着目し、この概念の正当性を問うたものである。技術的対象は進化するというのはシモンドンのよく知られた主張であり、彼はこれを「具体化」(concrétisation)という語で説明した。しかし、そもそも技術が「進化する」とか

「進歩する」という言い方は妥当なものなのだろうか。Bontempsはこの概念を詳しく検討する。彼はまずGeorge BasallaやClaude Lévi-Straussなどに見られる批判、すなわち技術の進歩史観は理論的というよりもイデオロギー的で、自民族中心主義的なヒエラルキーに根ざしているのではないかというそれを確認する。インカ文明に車輪を備えた乗り物がなかったからと言ってわれわれは車が存在する文明に比べてそれが劣った文明だということが言えるだろうか。進歩史観の反対者はそのように述べることは出来ないとして技術の進歩概念に反対するのである。

これに対してBontempsは「技術的系譜」の存在が進歩を仮定するのであり、この系譜が存在する限り技術的対象のうちに進歩をみてとることは妥当なものであると考えている。そして、過去の思想家を挙げつつこれを詳しく論じている。考古学的方法の提唱者でイギリスの軍人でもあるPitt Rivers (1827-1900)は類型学的方法を武器の分類に導入した。彼は外的形態に則して武器を並べることで歴史的に古い武器から新しい武器へという系譜を描いてみせた。技術的対象の形態を辿ることで年代的順序を措定出来ることを示したのである。Pitt Riversの類型学的方法は後にJacques Lafitte (1884-1966)によって再び見出されることになる。Lafitteは対象の外的形態のみならず、内的組織化を考慮に入れることでPitt Riversの方法を練り上げた。シモンドン自身はLafitteの仕事を知らなかったが『身振りと言葉』で有名なAndré Leroi-Gourhanに依拠することでその方法を再発明したとBontempsは述べている。

もっとも、シモンドンは単にLafitteの主張を繰り返すだけに留まらない。シモンドンは使用的機能と操作的作動の区別、すなわち、技術的対象の進歩を利便性の向上といった使用的側面だけで測るのではなく、対象それ自身の側面からも考慮するという独自の視点をもっていた。また、技術的対象の発明やその限界について述べた点で系譜的というよりも発生的に技術的対象を理解していたことはBontempsも指摘しているところである。シモンドンにとって、技術的対象はいかなる部分的改良も不可能な構造的飽和状態を迎えたときに全体的な再組織化が行われるのであって、その進歩は連続的に進むのではなく、リズムをもった周期的なものとして考えられているのである。

これに加えてBontempsはシモンドンそしてJacques LafitteやAndré Leroi-Gourhanの技術進化のモデルがダーウィンのそれに基づくのではなく、ラマルクの獲得形質の遺伝に基づいたものであることも指摘している。Bontempsは本論の冒頭で進歩という概念が目的論を喚起することから彼が言うところの「悲観的な」哲学者から避けられているとしていたが、シモンドンをはじめとした上記の人々の技術進化の思想は批判されるような目的論的なものではなく進歩概念の改鑄の必要性を述べて論を閉じている。

シモンドン自身は影響を受けていないものの、Pitt RiversやJacques Lafitteを参照軸に据えることでシモンドンの技術論における方法論的側面に言及している点で本論文は注目に値する。ともすれば、シモンドンの技術進化の議論は彼固有の思想として受け入れられがちである。しかし、シモンドンの議論は著名な先史学者で文化人類学者でもあるAndré Leroi-Gourhanの実証的な仕事を背景とする研究に裏打ちされたものである。そこには他の領域を横断しつつ基礎的な概念を問いに付すという方法が存在している。評者の考えでは、そうした方法は壮大な自然哲学が構想されている彼の博士主論文*L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information*から一貫して採用されているものである。シモンドンが

物理学や生物学の知見を持ち出すのは、彼の思想の例証のためではない。そうではなくて、それらを介して自身の哲学を練り上げていったというのが評者の理解である。思想が先行するのではなく科学的事実や技術的事実とともに形而上学を再構築すること、それはおそらくエピステモロジーの代表者であるガストン・バシュラール（1884-1962）の試みとも重なるものであろう¹⁾。

いずれにせよ、著作のみならず徐々に講義録が出版されているなかでこれからシモンドンを理解しようとする人々には、シモンドンのそうした方法を自覚しつつ読解に取り組むことが求められるだろう。また、そうしたシモンドンの方法を意識しつつ彼の著作を紐解くことは単に彼の哲学の理解を進めるだけでなく、哲学が他の学問を基礎付けるのでもなければ、他の学問に哲学が吸収されてしまうのでもない、哲学と他の学問分野の豊かな対話の一形態をわれわれに教えてくれると評者は考えている。

おわりに

以上、すべてを取り上げることは出来なかったが本書に取められている論文を紹介してきた。最後に評者の観点から本書全体についてコメントを付すことでこの書評を終えたい。

まず指摘しておかなければならないが、収録されている論文はコロックをもとにしているという背景もあつてか、試論的性格が濃いものが散見された。本書のこうした特徴によってわれわれは現代の技術論者が展開する最先端の議論に触れることが出来る一方で、いくつかの論文は素描的段階に留まっており、議論が粗い印象を受けた。もっとも、こうした書物の価値は議論の精密さよりはむしろ、多数の著者によって展開される議論の広がり、その豊かさによって測られるべきものであろう。一口に技術論と言ってもさまざまな視座から論を組み立てることが可能であり、本書は技術論の様々なバリエーションを示している。読者は技術論のアイデアの宝庫として本書を手にとると良いだろう。

加えて印象的だったのが、シモンドン以外の技術論者への積極的言及である。多くの論者がシモンドンに言及している一方、各著者同士の相互言及や日本ではなじみのない学者の引用などが多く見られた。冒頭でも述べた通り、フランスには決して主流とはならなかったが、技術論の系譜が脈々と受け継がれてきており、この分野における層の厚さを窺い知ることができた。編者のひとりである Daniel Parrochia をはじめ独創的な思想を展開している人物は少なくなく、今後紹介されていくべきであろう。

技術論はその性格からして、時代の制約を大きく受ける。シモンドンの技術論は、その主張は別として扱っている技術的对象は決して新しいものとは言えない。われわれがシモンドンの技術論に触発されてシモンドンの後に技術について考えようとするのであれば、単にその議論を鵜呑みにするのではなく、それを引き受けた上で現代の技術に見合った議論をわれわれの言葉で紡いでいくしかない。本書の著者たちは自覚的にそうした仕事に取り組んでいた。

注

- 1) シモンドンをエピステモロジーの系譜に位置づけることが出来るかという点に関してはいまだに研究者の間で意見は一致していない。しかし、たとえばシモンドンの「関係の实在論」という思想の萌芽をバシュラルの内に見出し、バシュラルをシモンドンの先駆者として評価しようとする研究としては Michel-Elie Martin, "*Les réalismes épistémologiques de Gaston Bachelard*", Éditions Universitaires de Dijon, 2012. などが参考になる。